

国際的資質のジェンダー位相 —日本における英語による教育プログラムに着目して—

嶋内 佐 絵

はじめに

グローバル化を背景に社会はますます多文化化し、多様な差異を越えて協し共存するためのスキルや資質の涵養が日本の教育、特に国際化した高等教育プログラムにおける大きな役割の一つとなっている。日本だけでなく、世界中で進行する高等教育の国際化とは、中等教育後の教育における目的や機能・展開に、国際的で文化的でグローバルな側面を統合するプロセスを指す (Knight 2015)。その具体的な事象は、国境を越えた学生・教員・教育サービスの移動や共同・複数学位の提供、ブランチキャンパスなど様々だが、その中でも国際的な共通語になりつつある英語による教育の提供が、欧州はじめとして、日本、韓国などアジア地域の非英語圏でも盛んに行われている。日本の大学における教育の英語化は、高等教育の世界的な市場化と国内の人口減少を背景とした留学生の受け入れ強化、高等教育機関の国内・国際的プロファイルの上昇、そして国際的競争力を持った日本人学生の育成など多面的な目的を持ち、各高等教育機関や学部により異なった目的やビジョンを持って導入されている (嶋内 2016)。Global 30 やスーパーグローバル大学創成支援事業、2003年に策定された2020年までの留学生30万人受け入れと言った留学生政策においても、英語を教授媒介言語とした教育プログラムは各大学における国際化戦略の中枢に位置づけられていると言えよう。

日本は長年、先進国の一員として受け入れに積極的な留学生政策を推し進めて来たが、近年では深化するグローバル経済や少子化、日本人学生

の「内向き志向」に対する懸念などを背景に、日本人留学生の海外送り出しやいわゆる「グローバル人材」の育成が重要視されている。そして多様な社会的・文化的背景をもった人々が共生する現代社会において、教育を通じた「国際的資質」や「国際性」醸成の必要性は自明であるようで、それが一体何を意味しているのか、どのような資質を指すのかについては様々な議論がトップダウン式になされている一方、実際の体現者（教育の受け手である学生）たちの声が聞かれることはあまりない。本研究は、国際化を進める日本の大学で急増しつつある英語による教育に焦点を当て、グローバル時代の人材育成を目的とした教育プログラムで学ぶ日本人学生が、それらの教育機会・経験をどのように位置づけ、「国際的資質」や「国際性」といった能力・スキルをどのように捉えているのかを学生の声から分析し、そこにどのようなジェンダー的特徴と差異があるのかを明らかにするものである。

英語・ジェンダー・高等教育の国際化

日本では2013年に女性の大学進学率が男性の進学率に比肩し（総務省統計局2015）、高等教育における機会の平等を達成したように見える一方で、いわゆる難関大学においては男子学生が在籍学生のうち圧倒的多数を占める。女子学生の割合は、たとえば東京大学では18.6%、京都大学では22.3%、明治大学では33.5%に過ぎず（各大学情報公開ページより最新のデータを参照）、依然内実を伴った教育機会の平等を達成しているとは言いがたい。しかしながら、このように男子学生を多く集める大学においても、英語による教育を行っている学部には女子学生の在籍が多いという特徴がある。例として早稲田大学では、全学における女子学生の割合は37.0%であるのに対し、英語で教育を行う国際教養学部の国内学生の内訳では、60%近い割合を女子学生が占めている。

英語による教育プログラム（English Medium Instructionプログラム、以降EMIプログラム）には、その構成する学生の様相（国内学生か留学生

嶋内 国際的資質のジェンダー位相—日本における英語による教育プログラムに着目して—

か)、教育プログラムの組織的単位(学部・学科・コース等)、専門分野やカリキュラムなどを含め様々な形態があり、かつ英語による授業の履修のみで学位を取得することが可能なもの(日本語による授業を受けなくてよいため、アカデミックな日本語運用能力を問われない)と、日本語による授業の履修が必要なものが存在する。嶋内(2016)は日本と韓国における英語による教育プログラムのうち、英語での履修のみで学士・修士などの学位を提供しているものをEMDP(English-medium Degree Programs)とし、その学生の様相を元に、3つのモデル(グローバル人材育成モデル、クロスロードモデル、出島モデル)に分類した。近年の国際化政策のなかでもGlobal 30プログラムによって新しく創設された大部分のEMDPはこの出島モデルにあたり、少数の外国人留学生に対し英語での教育の提供を行うことで日本留学の門戸を広げ、より優秀な留学生の獲得を目指している。クロスロードモデルのEMDPは、多数の外国人留学生と日本人学生が在籍するが、上記にある早稲田大学国際教養学部のように、学生数が多く知名度の高い総合私立大学を中心とした一部にのみ存在している。一方、グローバル人材育成モデルのEMDPとは、その構成員のほとんどが日本国内の一条校出身の学生であり、現状日本における大多数のプログラムはこのグローバル人材育成モデルに属すると報告されている。そこで本研究では、日本人学生における国際的資質のジェンダー位相を検討するため、日本学生支援機構(2016)の最新リストからこのグローバル人材育成モデルのEMIプログラム(日本語による授業の履修が必要なプログラムを含む)のうち学部レベルで開講されているもの7校を取り上げ、そこでの女子学生の割合を調べた。結果は以下のとおりである。

表1 グローバル人材育成モデルのEMIプログラムとそのジェンダー割合

大学・EMIプログラム名	男女比	女子学生の割合 (EMIプログラム)	女子学生の割合 (大学全体)
国際教養大学	Total: 899 (*1)	61.5%	- (*2)
国際基督教大学	952:1730	64.5%	- (*2)
宮崎国際大学国際教養学部	116:150	56.3%	57.6%
関西学院大学国際学部	440:835	65.5%	48.4%
明治学院大学国際学部	356:957	72.9%	58.1%
法政大学グローバル教養学部	115:178	60.8%	35.8%
立命館大学国際関係学部	846:1402	60.3%	36.5%

(筆者作成。学生数は各大学公式サイトの情報公開より、2015年度の最新データを参照。)

(*1) 在籍学生の男女別学生数は公開されていない(女子学生の割合のみ公開)。

(*2) 上記2つの大学に関しては大学全体でEMIによる教育を行っている。

これらの表から見て行くと、EMIプログラムに加えて同じく女子学生の割合の高い教育学部を有する宮崎国際大学をのぞき、大学全体での女子学生の割合よりも、EMIプログラムにおける女子学生のプレゼンスが大きい。多くの大学において、大学全体としては女子学生よりも男子学生の方が多数にも関わらず、英語による教育を行っている学部や大学では、女子学生が全体の6割から7割を占めている。またこのようなグローバル人材育成型のEMIプログラム全体に共通した特色であるが、国際教養などの学際的で分野横断型のカリキュラムを保持していることが多く、そこでは国際関係、国際経済、国際協力等の専門科目が含まれている。

日本のEMIプログラムにおいて、女子学生が多いこと理由を直接的に説明できる学術的研究は存在しないが、教授媒介言語として使用されている英語と日本人女性の関連では国内外で多くの研究がある。たとえば Kobayashi (2010) は、日本人女性の英語に対する積極的な態度が、日本

社会において女性が相対的に周辺化されていることや、女性の「より良い人生」のための効果的なツールとして英語を宣伝する英会話産業の存在など、社会的・教育的背景に起因することを示唆している。寺沢（2015）の研究では日本人と英語に関する様々な現象を計量分析を通して論じているが、英語と女性に関する結果および考察には以下がある。

1. 英語使用において、平均的に見た場合、女性の方が男性よりも英語を使っているという傾向はなく、高等教育を受けた女性の仕事における使用率も男性より大幅に低い。また英語使用の必要性に関しても、女性の方が低い（85-89、172）。
2. 英語学習に関し、男女全体の平均的傾向としては外国語学習への意欲に大きな差はなく、女性が英語好きという言説はジェンダー差を過剰に一般化したものである（110）。
3. 英語志向は社会階層の上層の女性に顕著な傾向であり、特に若年層で高学歴、ホワイトカラー職で都市居住の女性と親和的である（132-136）。

これらの分析から、英語学習と女性性の結びつきは決して強固なものではないとした上で、女性が英語を使用する仕事など英語を生かす機会から排除されているような社会環境も明らかにされている。事実日本では、男女間における高等教育へのアクセス自体はほぼ均等に近づき、男女雇用機会均等法により職場における男女差別が法律的に禁止されているにも関わらず、いまだ多くの女性が非正規や非専門職での雇用に留まっていることも指摘されている（Brinton 1993; Lam 1993）。一方、日本学生支援機構（2015）の把握する協定等に基づく日本人学生の海外留学数では、男女比が約35：65であり、女性の方が男性よりも海外留学に積極的である。このような海外経験の男女格差があるにも関わらず、企業では男性の方がより多く海外出張の機会を与えられている（寺沢 2015）。

英語自体は教育を通じて習得することができるスキルである一方で、国際的資質に関しては、その用語自体にも概念にもユニバーサルな定義や共通見解が存在しない。日本においては、日本人学生の海外留学生数の減少

や「内向き志向」を背景に（横田・小林 2013）、世界で活躍する「グローバル人材」が持つべき資質とはなにかが議論されている。2011年に発表されたグローバル人材育成推進会議による報告では、「グローバル人材」に必要とされる要素として「語学力、コミュニケーション能力」、「主体性・積極性・チャレンジ精神」に加え、「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」の三点が挙げられており、「日本」という国を構成する様々な要素を持って体現する「日本人」としての自覚や主体性といった武器を持つことが期待されている（嶋内 2014）。また、日本の旧帝国大学でグローバリゼーション、異文化環境、英語に関する意識を質的に調査した研究（Morita 2013）においては、学生達は英語の運用能力を始めとする異文化環境を生きるための能力を持つことは好ましいと考えているが、半数の学生は実際はそのような環境にはいないと感じており、その態度は国際語としての英語の重要性や日本の文化を脅かすものとしてのグローバリゼーションといった政府のレトリックと呼応していることが指摘されている。Lilley 他（2014）の研究では、642名の学生に「グローバル市民」のコンセプトを問うたところ、そのコンセプトとして人間性（human-beingness）やつながり（connectedness）、変容（transformation）といったキーワードが抽出された。また米国の大学生701人を対象にした量的調査では、留学や海外就業、グローバル経済への態度などに指標化された国際主義において、女子学生よりも男子学生の方がより国際主義にオープンであり、かつ米国の優位性に関しても男子学生の方がより強い肯定感を持っていることが明らかにされている（Clarke 2004）。このように国際的資質や国際意識、国際主義といった概念に関しては、その用語だけでなく、国や地域、調査実施者や対象者によっても捉え方の異なるものであり、その意味合いは未だ揺れている。

以上のように、日本人女性や女子学生と英語、高等教育と国際的資質の形成といったテーマにおける先行研究は存在するものの、非英語圏における国際的な人材育成を目的とした英語による教育プログラムという教育実

践のなかで国際的資質がどのように捉えられているのか、またそこでのジェンダー位相について分析する研究はいまだ存在しない。はたして、英語による教育経験において学生がどのような目的意識を持ち、何を学び得ているのか。また、そこでの経験を通して「国際的資質」や「国際性」といったものをどのように捉えているのか。またその捉え方にはどのような男女間の差異があり、それらが日本社会におけるどのようなジェンダーの位相を反映しているのか。本研究では、以上の3点を中心に、インタビュー調査を通じて描き出し、議論していきたい。

方 法

本研究を行ったY大学は首都圏に位置する4年制大学で、近年の改編を経て設立された国際教養、国際経営などの専門を含む「国際」を冠した学際系の学部を擁している。英語でのみ学位取得可能な学部（EMDP）ではないが、留学協定校の締結など積極的な国際化戦略を進める中で、“Internationalization at home”（内なる国際化）（Knight 2006）の一側面であるカリキュラム国際化の一貫として、年々英語による授業を増やしている。Y大学における2011年度からの入学者男女数のデータを見てみると、5年間の合計でみた女子学生の割合は国際教養系74%、国際都市系68%、経営科学系47%、理学系51%（すべて小数点以下四捨五入）で、後者2つの学系では男女の割合がほぼ半々なのに対し、前者2つの学系での女子学生のプレゼンスが大きくなっている。また、大学全体で見ると男子学生の方が多いものの、英語による教育の受講者では、女子学生数が男子学生数を上回っている。表1にあげた大学を始めとして、日本において英語による教育を導入している大学に進学する女性は、寺沢（2015）の指摘する「若年層で高学歴」な条件を兼ね揃えた社会的階層の上層に位置すると推測されることから、ここでも女子学生は英語を使った教育への志向性が強い傾向にあると言えるだろう。

本研究では、国際系学部所属で英語による授業を履修した経験を持つ男

男子学生5名、女子学生7名の学生に半構造化インタビュー調査を行った。手続きとして、2015年度の夏期休暇期間に、2013年度から2015年度前期までに英語による3つの授業（それぞれ比較国際教育、日本研究、グローバル・コミュニケーション論）を履修した学生を対象にインタビュー調査に関する協力依頼メールを送り、協力可能と返答した学生を先着順にインタビューの対象とした。これらの授業科目は、日本人の女性教員によって100%英語で行われている科目であり、カリキュラム上教養科目群に属しているため、履修者は主に1、2年生で特に英語力の向上に関心の高い学生、英語が好きな学生、また履修時にある程度英語力に自信のある学生が履修する傾向にある。日本語の授業と異なり、ディスカッションへの積極的な参加やグループプレゼンテーション、エッセイの提出など多くの課題がある科目だが、履修希望者は定員を超えることが多く、エッセイや英語試験のスコア提出などのスクリーニングを経た学生が履修するため、概して学

表2 インタビューリスト

名前	男女別	専攻	学年	受講 EMI 授業数
Yuki	女	心理学	3	4
Rimi	女	国際経済	3	1
Maria	女	国際協力	3	2
Sari	女	社会学	3	2
Nina	女	国際政治	2	2
Minami	女	国際協力	2	1
Makiko	女	哲学	3	3
Keito	男	教育	2	2
Takashi	男	国際関係	2	3
Kenya	男	医学	2	2
Reiji	男	社会学	2	3
Eijiro	男	社会学	3	2

*名前はすべて仮名、学年はインタビュー当時のもので、履修時は主に1学年もしくは2学年である。

生のモチベーションや英語運用能力は高い。

具体的な質問項目としては、英語による授業を選択した理由、英語による教育経験をどのように捉え、どのような「国際性」を身につけたと考えているのか、また国際性や国際的資質とはどのようなものだと考えているのかを中心に、学生の語りに応じて柔軟に対話する半構造化インタビューの形式を取った。インタビューはすべて録音した後、筆者によって書き起しを行い、データは学びへの動機や成果を語るときに使われるキーワードや経験等を元にコード化して整理し、国際的資質の捉え方とジェンダーにおける位相等を検討しながら考察した。

結 果

インタビューの結果まず明らかになったことは、英語による授業の当初の履修動機と実際の経験から身についたと学生が感じたことの間にある差異である。英語による授業を受ける理由として学生たちが共通して挙げたのは、「英語の基本的な能力を全部身につけたい」(Maria)、「英語を上達させたい」(Keito)など、「*tangible benefit* (筆者注：分かりやすく手に入れられる利益)としての英語」(Yuki)の実用的な運用能力に対する習得意欲である。これらの授業が教養科目に位置づけられていること、履修者のほとんどが新生児であることも一つの要因ではあるが、その科目が提供している専門や授業内容への深い関心より、学生のほとんどが英語力の向上そのものを第一の履修目的に挙げる。その背景には、高校まで受けて来た「インプット重視」(Makiko)やY大学はじめ多くの日本の大学での英語教育の授業で見られる「英語のための英語の授業」(Rimi)への不満があり、そこから飛躍して「自分で考えてディスカッションできる英語の力」(Rimi)や「会話をするツールとしての英語の楽しさ」(Eijiro)を実践するためのものとして英語による授業を位置づけている。習得したい英語のレベルは学生によって異なり、「異国の友達と少し難しいコミュニケーションを取れるようになるくらい」(Nina)であったり、「アメリカで学術

研究ができるくらい」(Yuki)であったりと、高度な日常会話からアカデミックレベルなど様々であるが、インプットよりも自分の意見の発信やプレゼンテーションスキルなどのアウトプット能力を身につける事への関心が強く表れた。また先に述べたように、英語による授業では、英語でアカデミックなコンテンツを学び、授業内で発言しプレゼンをする能力が求められるため、履修者には一定以上の英語力があることが条件となっている。そのため履修希望者の中には、高校時代までの留学経験者や日本国籍以外の両親のもと育ったという家庭環境などから、自らが持つ英語力持続という動機を持つ学生もいた。いずれにしても英語による授業を履修する学生たちに共通していたのは、履修時点で持っていた目的は大学時代に身につけられるスキルとしての英語力の向上もしくは維持であり、英語での教育経験を通して国際的資質や国際感覚を磨くといった観点は現れてこない。

一方、英語による学びの経験は、当初の動機より多様なものであったようだ。たとえば複数の学生から挙げられたのは、EMIによる授業と通常の日本語による授業との間で見られる学生の態度の違いであった。「寝ていたり、課題をやったり」(Rimi)している他の授業と比べ、「寝ている人がなくて、みんな先生がしゃべっているのを見ているんですね。内容に興味のある子も揃っていて、興味がなくても聞いてみようっていう姿勢をとる子が多かったのかも」(Maria)というように、英語による授業へのコミットメントの深さを指摘する声が複数あった。このような態度の違いの背景には、これらの授業は受講のハードルも高く、選択科目であること、履修人数制限によるスクリーニングを通して高い英語力と授業への意欲を持った学生が選ばれているという事情もある。一方、このように授業への積極的な姿勢を持つ学生が多くなかで、授業中に自分の意見を表現することへの葛藤があったことがたびたび表現されていた。

「手挙げるのも結構勇気いりますもんね。あの子こんなこと言っているけど、どうなんだろう?と思ったときに、『言ったところでどうな

るの?』とってしまう。(中略) 結構周りの目を気にするというか、これを言ったら授業の流れがおかしくなっちゃわないかなとか、質問の意図と外れたことっていないかな?とか」(Rimi)

「自分たちくらいの世代とか、それより2、3歳年上のいわゆるゆとり世代って、協調したほうがいいよね、っていう雰囲気を自分たちで作っている気がしますね。如何に波風立てないかってことに神経使っているというか」(Reiji)

人とは違う意見を持つことや自分の意見をはっきり表明することへの戸惑いは、複数の学生が口にしてはいるが、なかなか自分の意見を言えない背景には、「自分の意見を持つ勉強をしてこなかった」(Minami) というこれまでの経験不足や「英語の授業ではあなたどう思う?っていう授業が多いのに、日本語でやる授業は答えがある」(Maria) といった教授媒介言語による授業スタイルの違いも浮かび上がってくる。そして「日本は割とグループで協調したがる感じがあるから、日本語だと(本当の意見を言うのが)怖いですよ」(Rimi) という語りに現れているのは、日本人学生同士の和を求める雰囲気や同調圧力とも呼べるようなものが、学生の意見の表明や疑問の表示への足かせになっている様子である。

それに対し、英語による授業では、「間違っても良いし、思ったことを言い合える」(Reiji) という。それを可能にしているのは、日本語と英語という言葉に対する学生達の認識の違いも背景にあると指摘されている。「婉曲表現も敬語もない」英語だと、「フランクに言える」(Makiko) ことが多く、「日本語だとこれ聞いたらバカって思われるんじゃないかと思える事も、英語だと何でも質問できる」(Reiji) というように、日本語で話す時より人と違うことに臆病にならずに済み、意見の表明や相手への問いかけを容易にし、学生の授業への取り組み方や態度にも変化をもたらしているようだ。

同時に授業を通して、当初の目的だった英語力の強化よりも、意見を言うための知識を得るための学習の重要性を指摘する声も上がった。まずは実感しやすい形での英語の運用能力にどうしても視点が行ってしまうが、英語による教育を実際に経験するというプロセスのなかで、言語の上達よりも大切なことへの気付きがあったことが語られている。

「自分の英語力だけでなく学力的な意味で、全然知識が足りないから意見が言えないんだっていう気付きがたくさんあって。結構主張する人の周りにはそれだけの意見を言えるだけの勉強をして、知識が付いているんだなっていうのを実感して、まずは勉強しなきゃ、何も知らない自分に気づかされたっていうか」(Sari)

「(それまでは英語の発音にコンプレックスを持っていたけれど)発音関係ないんだな、とおもいました。英語ができて、知識がないと話せないというか。英語の勉強が増えたっていうよりも、その時事問題とか歴史問題をリサーチする時間が増えました」(Maria)

Mariaは、英語による授業で「授業中に(発言の内容を)否定されたことが一回もなかった」という経験を元に、国際的資質とは「多角的な視点から物事を見ること」であり、同時に「譲歩する力」である、と言う。日本と周辺諸国の間には、国家間の緊張をもたらす様々な問題が存在しており、例えばその一つに領土問題がある。彼女は日本と韓国の間には存在する領土問題で、日本人学生と比べ韓国人学生が比較的強い意見を持っていることを知り、そのときに認識の違いをどう乗り越えたらよいかを考え、その対話方法として以下のような具体的な方法を描写する。

「『え! ?』とか言うんじゃないで、まずは『そうなんだ』から始めるといいうか。まずは一歩目を譲歩して、こういう問題どう思う?と

か、こういう見方できない？っていう言い方が出来ないかなと思って」

(Maria)

他にも、国際的資質とは「他者を受け入れる力」であり、それは「相手の文化だったり歴史だったりをしっかりと受け入れてそこからすべてが始まる。色んな視点から見ると、多角的に見る」(Keito) ことである、という意見もあった。また、「異文化を持つ人と関わって行くためには、自分を開示していくことも必要だし、同時に向こうも受け止めなきゃいけない。そういうのは語学面以上に必要」であると同時に、「相手が自分のことを知ろうとしてくれていると感じることで交流しやすくなるし、最初からおじけづかずにオープンで自分を開いてみせていくことが大事」と言い、そのためには、「自分を知っておかなきゃいけない」とSariはいう。またTakashiは同様のことについて、本当は疲れているときに「うまく振る舞っていた」自分と、その後本当の状態を素直に表現したときに得た体験から、素直に振る舞うことがコミュニケーションの第一段階だと語った。「感情豊かな方が良いと思いますね。自分の感情を発信したり、辛い、悲しい気持ちをボディランゲージや表情で表すって言うコミュニケーションもコミュニケーションスキルの重要なパートだと思います」(Takashi)。

他者理解は、相手を受け入れることと自分が受け入れられること双方があってこそ成り立つという指摘も重要である。ここでは、相手と理解し合うための英語力など、分かりやすく判断されることの多いコミュニケーション能力といった認知的スキルに対し、自信、やる気、自らの考えや気持ちを表示し相手と共感し合う力や相手を受け入れる力、異質なものに対する忍耐力といった非認知的なスキルへの気づきが示唆されている。

次に、「国際的資質」の捉え方におけるジェンダー間の差異を検討してみる。先行研究では、女性の方が英語を使う機会や必要性から相対的に遠い場所にいる一方で、背景となる現実として女性(女子学生)の方が留学や英語による教育を受ける経験を多く得ていることが分かっている。今

回の学生へのインタビューからは、英語による授業を選ぶ動機や目的、その経験に関しては、突出したジェンダー間の相違や特徴などは見いだせなかった。その理由としては、英語による教育機会を自ら得るということ自体が一つのフィルターになっており、異なった目的意識を持つ学生を入り口で排除している可能性があげられる。

しかし一点、国際的資質の捉え方において、複数の男子学生へのインタビューのなかでみられ、女子学生からは聞かれなかったことに「日本人」と「国際／海外」の対比、もしくはそのバランスへの関心がある。たとえば国際問題を考える上で「自分自身のアイデンティティを考えるようになった」(Keito) という学生は、アイデンティティとは自分の軸であり、それがないと流されてしまうものと規定した上で、「海外に出よう、出よう」という世間の動きを批判的に見ながら「自分が必要な中で、『国際』になっていけば良い」のであり、「外へ意識が向くばかりで『国際慣れ』し、自分の国を大事にできないのは嫌だ」と話す。海外留学経験があるReijiも、最近の「めざせ海外」のような風潮や英語の早期教育などに不信感を抱きつつ、「参考にすべきところはすべきだと思うけど、日本人にあっていないことは変える必要がない」と言う。Kenyaは、世の中の宗教や思想、性的価値観などが多様であるなかで、「相手と違っていたときに、その差を埋めて行くという対話が必要」なことを認める一方で、その「必要性」は検討する必要があるが、「埋めないと著しい損害が生じる場合は埋める必要があるが、そうでない場合は埋める必要がない」と言う。

国際性の醸成や国際的資質が話題になるときに、それとは対比する形で「日本」や「日本人」、「日本人としてのアイデンティティを持った自分自身」などを含む「日本的なるもの」を配置し、その間のバランスを取ろうとしたり、自分のアイデンティティや「日本人らしさ」を守ろうとしたりするような言説は、複数の男子学生のみから聞かれるものだった。このような論法は、たとえば小学校英語教育の導入などが議論される際の、英語よりも日本語教育が重要だという意見や、英語を勉強する事で日本語の勉強が

おろそかになるという危機感の主張にも見られるものである。国家的なものや国際的なものをトレードオフの関係とみなし、両方のバランスを取る必要性、「日本」という自らの障地を守ることを主張する傾向は、日本で行われている多くの政策決定上の言論と共通している。日本ではこれらの政策決定に関する議論が、多くの場合男性によってなされていることと偶然の一致ではないのではないだろうか。

最後に、英語による授業の履修理由に、教員が女性であることを男子学生、女子学生双方から挙げられたことも記しておく。Y大学も他の多くの日本の大学と同様、教員の多くが男性であり、それは「国際」を冠し多様性の重要性を謳う学部においても例外ではない。その中で、英語による講義群の一部を女性教員が担当しており、その履修学生が「女の先生がやるっていうのも少ないから、女の人の目線でしゃべってくれるのかなと思って」(Maria)、「女性でかつ社会で活躍している女性の先生に会う機会があまりない」(Kenya)と女性教員への期待を語る。教員が自らのジェンダーに意識的であるかそうではないかは別にしても、学生の側からは教員が女性であることを通して、より多様な教育経験を求める視点があることを示している。

考 察

「日本社会で生活する人のうち、英語を日常的に必要とする人はまだかなり限定的である」(寺沢 2015:93)とあるように、首都圏に暮らす大学生であっても日常生活のなかで英語を使って自分の意見を述べるような機会は決して多くない。Y大学の国際系学部元学部長へのインタビューでは、一般的に日本人学生の授業における消極性が問題視されており、それは入試難易度が高く、いわゆる難関私立大学の併願校としても受験されることの多いY大学においても例外ではない。入学・進級・卒業要件のなかで一定の英語力を求めても、実際に英語を「使える」学生は少なかったという。そのため、国際系学部を再編するにあたり、学生の英語力を伸ばすことに

加え、学生のディスカッション力（自分の意見を論理的に述べ、他者と対話する力）を養うことを目的に英語による授業が開設された。本研究でも、インタビューに答えた多くの学生が当初は認知的なスキルとしての英語力に関心があったが、英語による教育の経験を通して学術的議論や問題への知的好奇心が高まり、結果的に国際的資質と呼ばれるものの重要性に気づいた、という様子が伺われた。さらに今回のインタビューで描きだされたのは、英語による教育の機会を通じ、人と異なること、自分の主張を表に出すことへの戸惑いが消えていく様子であった。それは国際社会において異なる背景を持った他者と接触するときに必要なと考えている、異質なものを受け入れる許容の力や自分を開示する姿勢にもつながっている。

一方、学生の国際的資質や国際性の醸成に関しては、教育的効果として評価することが難しいものである。しかし今回のインタビューを通して、学生が抱んだそれらに対する手応えは、たとえばグローバル人材育成に関する政策関連文書で触れられているものとは少し異なるものであった。国際的資質を持った学生の育成に関する政策は、学生のいわゆる「内向き志向」やコミュニケーション能力（特に英語力）の他の先進国・アジア諸国に比べた相対的低さへの懸念を根底に、学生の外国語能力の向上をはじめ積極性や主体性、チャレンジ精神、日本人としてのアイデンティティの確立など、自分を強く打ち出し、外に出て行く日本人をイメージしている。一方、今回インタビューを行った学生達が述べていたのは、他者を受け入れる力、譲歩する力、自分を開示することの重要性などであった。その前提としては無論自分の意見もしっかり述べること、そしてそれを可能にする語学力が存在するが、国際的資質とはそれを踏まえた上での価値観の多様性の受容と柔軟でオープンな自己性である。

また、国際的資質の捉え方にはジェンダー間の差異も見られた。英語による教育プログラムに女子学生が多く存在するという傾向は、単純に女子学生の英語への関心の高さや語学力の相対的高さから説明されがちである。しかし、今回のインタビューのなかで浮かび上がって来たように、英

嶋内 国際的資質のジェンダー位相—日本における英語による教育プログラムに着目して—
語能力を伸ばすことへのモチベーションや学びの目的意識において特筆すべきジェンダー差が見られなかった一方で、男子学生の間では「国際」的なものと対照的な位置に置かれた「国家（日本）」的なものを失うことへの危機感が見られ、それが女子学生の語りからは聞かれなかったことから、国際的資質や国際意識というものの自体に対して女子学生がより受容的であり、オープンな姿勢を持っているのではないかと示唆される。

限られた学生に対するインタビュー調査という性質から、今回取り上げた学生の声をもって英語による教育での経験を一般化するのは難しい。しかし日本の高等教育国際化の文脈におけるEMIプログラムのような取り組みはまだ歴史が浅く、ここで抽出された様々な知見や発見は、今後より大きな規模で調査をする際の指針になり、相互補完的に参照することが可能であると考えられる。

引用文献

- Brinton, M. C. (1993). *Women and the economic miracle: Gender and work in postwar Japan*. Berkeley: University of California Press.
- Clarke, V. (2004). Students' global awareness and attitudes to internationalism in a world of cultural convergence. *Journal of Research in International Education*, 3(1), 51-70.
- Knight, J. (2006). *Internationalization of Higher Education: New Directions, New Challenges: 2005 IAU Global Survey Report*. International Association of Universities.
- Knight, J. (2015). Updated definition of internationalization. *International higher education*, (33).
- Kobayashi, Y. (2010). The role of gender in foreign language learning attitudes: Japanese female students' attitudes towards English learning. *Gender and Education*, 14(2), 181-197.

- Lam, A. (1993). Equal employment opportunities for Japanese women: changing company practice., in Hunter, J. (ed.), *Japanese women working*, London and New York: Routledge, 197-221.
- Lilley, K., Barker, M., & Harris, N. (2014). Exploring the Process of Global Citizen Learning and the Student Mind-Set. *Journal of Studies in International Education*, vol. 19 (3), 225-245.
- Morita, L. (2013). Japanese university students' attitudes towards globalisation, intercultural contexts and English. *World Journal of English Language*, 3(4), p31.
- 嶋内佐絵 (2014) 「グローバル人材育成と大学の国際化に関する一考察」『横浜市立大学社会科学系論叢』第66巻, 第1号, pp. 109-126
- 嶋内佐絵 (2016) 『東アジアにおける留学生移動のパラダイム転換 大学国際化と「英語プログラム」の日韓比較』東信堂
- 総務省統計局 (2015) 『日本の統計』第22章教育 <http://www.stat.go.jp/data/nihon/22.htm> (2016年5月27日アクセス)
- 寺沢拓敬 (2015) 『「日本人と英語」の社会学 なぜ英語教育論は誤解だらけなのか』研究社
- 日本学生支援機構 (2015) 平成25年度協定等に基づく日本人学生留学状況調査結果 (平成27年2月) http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data14_s.html#no2 (2016年5月20日アクセス)
- 日本学生支援機構 (2016) University degree courses offered in English (Bachelor) (revised March 2016) http://www.jasso.go.jp/ryugaku/study_j/search/__icsFiles/afieldfile/2016/05/10/degree_english16_1.pdf (2016年5月20日アクセス)
- 横田雅弘・小林明 (2013) 『大学の国際化と日本人学生の国際志向性』学文社